

平成16年度教育研究発表会のご案内

香川大学教育学部附属坂出中学校
校長 岡田 泰士

本校では、平成12年度から14年度まで、幼・小・中12年間の一貫教育におけるカリキュラム研究を経て、平成15年度より教育制度「5・4制」に関する研究に着手しており、中学校における4年間の学びの在り方とその学びを構築する授業構造の在り方について研究を進めております。

この度、下記の日程で平成16年度教育研究発表会を開催するはこびとなりました。つきましては、是非、ご参会いただき、ご指導、ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

記

- 1 研究主題 豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造
ー「自己育成力」を中心とした授業改革をめざしてー
- 2 期 日 平成16年6月10日（木）
- 3 会 場 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 香川県坂出市青葉町1番7番
Tel 0877-46-2695 FAX 0877-46-4428
E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp
HP <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~sakachu/>
- 4 内 容
 - ・全体提案
 - ・総合学習実践報告及び公開授業
 - ・公開授業（教科・選択・小6合同）
 - ・教科研究発表ならびに討議会
 - ・講演 田中 統治 先生（筑波大学）

次頁以降に平成15年度の研究の概要を掲載しております。

平成15年度の研究

〔研究主題〕

豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造

「自己育成力」を中心とした授業改革をめざして

1. 研究の概要

本校ではこれまで、生涯学習の力を育成するための学習指導と評価の実践研究に取り組み、主体的な個の学びの構築について「内的ネットワーク」をキーワードに自己の内面において主体的に認識の結合を図る学習理論を考案し、学習する個をいかに育てていくかの実践を行った。さらに、内的ネットワークの学習理論を学習集団の中でより高めていく方法として「コミュニケーション活動」に着目し、個の支援から集団への支援へと視点を移した授業構築の研究に取り組んだ。

平成12～14年度の3年間にわたり、文科省の研究開発学校の指定を受け「幼・小・中12年間の一貫教育における教育課程のあり方」について研究し、学びの連続性をキーワードに教科内容の精選や校種間の連携等について、その必要性や可能性について検証した。

そこで、上記の研究をベースに、本年度は、研究テーマに「豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造」を掲げ、生徒が主体的・創造的に生きる力を身に付けていくため、「自己育成力」をキーワードに学校教育における学びの構造をより具体化したトータルカリキュラムの構築を目指し、その基盤となる授業改革に取り組むこととした。

また、文科省より新たに「学校教育制度における『5・4制』の区切りに関する妥当性の検証」に関して研究開発学校の指定を受け、中学校を4年間とした学びの構造についてもあわせて研究を進めている。

2. 研究の内容

(1) 「豊かな学び」と「自己育成力」について

研究テーマに掲げた「豊かな学び」を「主体的・創造的に知識・経験を獲得し、よりよい自己をつくること」と定義し、その豊かな学びを育むために、「自己育成力」をキーワードとして学校教育の中心に据え、カリキュラム編成及び授業改革を行っている。

「自己育成力」

自己の学びを対象化し、相対化することにより、自己の学習状況、思考状況、存在状況を的確に認識するとともに、今後の自己の学びの方向性を適切に見いだすこと。

① 対象化する力 ② 相対化する力 ③ 学びの方向性を見いだす力

(2) 「自己育成力」を活かした授業展開

「自己育成力」を引き出し活性化する授業展開を下表のように考え、授業構築のポイントを全教科、全領

域で明確化し実践している。

① 学習目標の明確化

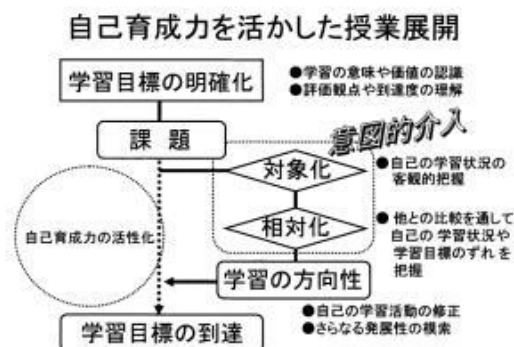
学習の意味や価値の認識

評価観点や到達度の理解

② 対象化…自己の現時点での学習状況を的確に把握すること。

③ 相対化…対象化された自己を他と比較し、自己の学習段階や目標とのズレを把握すること。

④ 学習の方向性…今後の自己の学習活動の修正やさらなる発展の方向性（課題）を見いだすこと。



【自己育能力を活かした授業展開】

(3) 「自己育能力」を中心に据えたトータルカリキュラム
次の3領域でカリキュラム編成を行っている。

〈共通教科（必修教科）〉教科の基礎・基本の定着

小6への教科指導実践・カリキュラム編成

○ 共通学習Ⅰ…教科の知識・技能の定着に重点を置いた学習。

○ 共通学習Ⅱ…教科内選択等、問題解決に重点を置いた学習。

〈選択教科〉教科の発展的学習

各教科「課題設定力の育成」と「課題解決力の育成」を共通目標に発展的学習を実践。

〈総合学習〉経験統合・自己評価フィールド

○ 生き方領域 ○ 学校文化領域

○ 現代的課題領域（さぬき未来学）（重点）

「さぬき未来学Ⅰ」…小6・中1の合同による合科型。各コースの設定するテーマに対して、調査・研究の方法論に関する基礎的学習（調べ方・まとめ方・発表の仕方）を実践。

「さぬき未来学Ⅱ」…中2・3合同による自己の学びの評価フィールド。

共通・選択で培ってきた力を、教科枠ではない知性（言語的、論理数学的、音楽的、身体運動的、空間認知的、人間関係形成、自己観察・管理、自然との共生）という視点で自己評価し、自己の学びの成果を再確認し、強化もしくは伸長させる学習。そこで得られた評価は、よりよい自己を創るための新たな課題として、次なる学びを喚起するものとなる。

豊かな学びを育むトータルカリキュラムの創造



【トータルカリキュラムの概観図】

共 通（必修）教 科（平成15年度の実践）

《国語科の提案》

豊かな言語認識の深化・拡充をめざす国語科授業の在り方

－国語科トータルカリキュラムの構築を目指して－

佐藤 宏一 佐藤 浩二

国語科では、従来より言語認識の深化・拡充を目指して、対話を通じた言語の客観的認識場面を授業の中に組み込み、自己の言語認識がどのような状態であるのかを自己理解させながら、新たな言語に対する価値付けを求める授業展開を研究してきた。本年度は、「自己育能力」を活かした授業展開を、従来からの国語科研究における言語認識の深化・拡充のための基本的授業スタイルとして、以下のように明確化し、全単元において新たな授業展開の構築と改革に取り組もうと考えている。

- ① 学習集団における自他の認識及び発言の位置を自覚する場。
- ② 学習集団としての言語活動を吟味し、その意味を発見する場。
- ③ 自他の思考の比較を通して、自己の思考の過程を見つめ直し、その在り方を自ら模索し、改善・発展させる場。

この方法論を用いて、既に精選した幼・小・中12年間の国語科における各領域の指導項目を、単元レベルで分析し、学習活動においても有機的な関連を図りながら、系統的・段階的に構成していくことで国語科におけるトータルカリキュラムを構築していこうと考えている。



【自他の思考の比較場面】

《社会科の提案》

社会的事象とのかかわりのなかで自己の生き方を問い直す社会科授業

－ 多面的・多角的な見方・考え方の育成 －

片岡 孝暢 安藤 孝泰

社会科の目標は「社会認識を通して公民的資質の基礎を養う」ことであるが、どのように社会認識を深め広げていくのかが大きな課題である。社会科では、「豊かな学び」を次のように捉えた。

- 生徒自身が社会的事象との出会いの中で、主体的に課題をつくり、多面的・多角的に課題を解決していくこと。
- 人々の富みや文化の意味を仲間や教師とともに問うなかで、新たな課題を発見し、さらに追究していくこと。
- 常に社会的事象とのかかわりのなかで自己の生き方を問い直していくこと。

そこで、豊かな学びを育むために「自己育能力」に着目して、以下のような実践研究を進めている。

(1) 教材開発

さまざまな観点や立場にたち、問題解決をするなかで自己の生き方を見つめ直し、あり方を発見できる教材。

(2) 授業開発

共通学習Ⅰ…各分野ごとに主体的な学習過程（課題設定→予想→検証→概括・応用）の各段階ごとの学習技能を明確化し、問い直し、確かな学力の定着を図る。

共通学習Ⅱ…共通学習Ⅰで身に付けた知識・技能をもとに、社会的事象を多様な視点から分析することで、総合的かつ的確にその様相を理解する。その上で自分の行為のあり方を考える。

《数学科の提案》

数学的な見方や考え方の育成をめざした数学科の授業のあり方

半山 章人 岡田 美江

数学科では、生涯学習に通ずる「生きる力」の育成に取り組むべく、従来より「生涯にわたって数学を活用」「数学の有用性」「数学的活動の楽しさ」「数学科における『生きる力』」というキーワードで研究実践を積み重ねてきた。そこで、本年度は、「自己育成力」という言葉をキーワードに授業の展開の仕方を工夫し、他との関わりや自らの振り返りを通して、数学的な見方や考え方を深めたいと考えている。そこで、研究を進めるにあたって以下のような研究仮説を立てている。

＜研究の仮説＞

数学的な事象において、課題解決に向けての自己の考え方を振り返らせたり、他者の考え方と比較させたりし、今後の学習につなげようとすることで、数学的な見方や考え方が深められると考える。

そこで、次の視点から授業を見直していきたい。

- ① 課題解決に至るまでの自己の考え方を振り返る場面の設定
- ② 多様な見方や考え方を引き出させる配慮
- ③ 自己育成力を活かすための効果的な学習形態の在り方の検討



【相対化している場面】

《理科の提案》

生涯学習につながる科学的に学ぶ力と豊かな自然観を育む理科学習

一 討論活動を効果的に取り入れた

自己をのばす学習サイクルの確立をめざして 一

真鍋 正史 石川 恭広

理科における自己育成力とは、学習での自己理解や実感を繰り返す中で、生徒が自己のもつ「自然事象を科学的に見たり、考えたりする力」の認知とその伸長を図り、自己や学習の課題に応じて根拠をもった実証ができる力だと考える。そのため、その自己育成力を活性化するために効果的だと考えた討論活動を、学習活動の中に意図的に取り入れ、生徒の認識がどのように進み、その後の学習にどう影響を与えるかを明らかにしようとしている。現在、これまでの研究の成果を踏まえ、次のような内容や方法で研究を進めている。

- 生徒の「自然事象を科学的に見たり、考えたりする力」の分析とその明確化
- 自己理解を促進させ、実感を感得できる効果的な討論活動のあり方を検討
- 討論カード(右図)などを活用し、討論活動によって生徒の認識がどのように進むのかを分析
- 他の学習活動において、自己育成力を活かした課題解決ができているか、その転移の状況を分析

《討論カード》	
()年()組()番()	
学習課題	
最初の仮説	
仮説の具体的な説明	
(納得チェック) 理解・強化レベル ()	
討論で感じたこと、自己の考えが固まったり、変わったりしたこと	
新しい仮説	

【討論活動の場面で活用した討論カード】

《音楽科の提案》

音楽を豊かに感じ・表現することができる生徒の育成

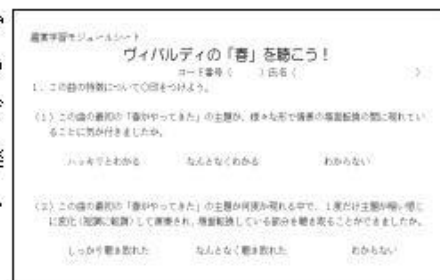
～ 音楽の「かたち」から「こころ」を味わえる音楽授業の展開 ～

十川裕史

音楽科では、豊かに感じ・表現することができる生徒の育成をめざし、音楽の「かたち」から「こころ」を味わわせる授業構想を考えている。音楽には、作曲家によって主観的な真実の世界である様々な感情が込められている。その思いは、リズムや旋律、和声、テクスチャー、形式、様式など諸要素の特徴の総和以上のまとまりである「かたち」によって運ばれる。生徒はその音楽から様々な感情を感覚的になんとなくとらえることはできるが、その感情をなかなかうまくことばにすることができない。感情はことばにして外に表現することで初めて自分のものになる。従って、音楽の「かたち」から「こころ」を味わわせるためには、その感情をいかに自分のことばで外に表現させることができるかが重要となり、そのために自己育成力を活

用した以下のような授業実践を試みようと考えている。

- (1) 感受した自己の状態を認識させるモジュールシートの開発
- (2) 感受した音の世界をことばで表現させる場の設定
- (3) 自己の感覚を他と交流することで、新しい音の世界を感受する可能性を拡げる場の設定



【モジュールシートの一例】

《美術科の提案》

美的創造感覚を高め、

生涯にわたって美を愛好する心情を培う美術科学習の展開

河内 直人

美術科における豊かな学びとは、感受した美や自己の思いを発露するとともに、ぬくもりややすらぎのある生活空間を創造するために、多様な表現技能やものの見方・感じ方を身に付けることと捉えている。そうした豊かな学びを可能ならしめる要素として①「美にあこがれをもち、自ら美的感動体験を求めて表現や鑑賞をすること（情意面）」②「自分の夢や思い・願いなどを自分らしく発揮するために、多様な表現の基礎基本を身に付けること（技能面）」③「芸術文化が、その国や民族のアイデンティティーと誇りであることに気付くとともに、人や自然・社会のメッセージを主体的に読みとり、その価値を共感すること（知識面）」の3つを掲げ、それぞれを連環させるカリキュラムを構築することにより生涯にわたって美を愛好する心情の礎となる美的創造感覚を高めたい。本年度は「自己育成力の活性化」という視点から主体的に美的創造感覚を磨き高める授業展開について実践研究を推進している。また、従来まで極めて個人的・主観的判断にその価値付けを委ねていた造形要素の解釈についても客観性を見だし、論理的根拠に基づく「わかり・できる」指導法を開発したいと考えている。

- (1) ビジュアル シンキング カリキュラムにおける「鑑賞の発達段階」の分析
- (2) ビジュアル シンキングに基づく授業開発
- (3) 豊かな学びの三要素を連環させたトータルカリキュラムの構築



《保健体育科の提案》

運動・身体・人とのかかわりを創造する保健体育学習

一 社会的スキルの向上を目指した

保健体育科トータルカリキュラムの構築

池下 一顕 長尾 亜紀

保健体育科では、「運動・身体・人とのかかわりを創造する保健体育学習」を主題として、その中でも人に教えたり、人と共に行ったり、仲間をつくるといった「人とのかかわり」に特に着目したいと考えている。そこで社会的スキルを1つの指標として、その向上を目指すために「自己育能力」を活かした授業展開を組み込んで研究を進めていく。生徒たちは生活や遊び体験不足から社会的スキルが未熟である。そこで、保健体育学習がもつ豊かな疑似社会体験性（身体活動性・集団性・情緒性・課題解決性等）をうまく利用しながら、社会的スキルを育てるための対人訓練技法を学習展開に取り入れた学習経験を充実させていきたい。【方略の工夫】それによって、自分自身の人とのかかわり方がどうかを見つめ直すことができ【対象化】、人とうまくかかわりをもつことができる自分づくりへとつなげていくことができる【相対化】と考えた。具体的な実践計画としては下記の通りである。

- ① 集団性の向上を目指した集団スポーツ（バレーボール・バスケットボール）の系統的指導・・・＜方＞
- ② グループダイナミクス理論による集団づくり・・・＜対、相＞
- ③ 異学年合同授業から学ぶ人とかかわり方・・・＜対、相＞



【中1・2による異学年合同授業】

《技術・家庭科の提案》

かかわりを実感し主体的に生活を創造する技術・家庭科学習

丸岡 正則 宮脇 委子

技術科では、「もの」や「ひと」とかかわって生活しているという認識をもち、自らの生活をより良く改善していく楽しさや成就感を味わうことが、主体的に生活を創造する実践力（生活の自立）につながると考え、本研究主題を設定した。そのためには、生徒が学習課題を発見し解決していくことを繰り返すことで自己を振り返り、生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を図ることで、自分なりの生活を工夫したり創造したりする能力と実践的な態度が育成できると考え以下のような研究仮説を立てた。

—研究仮説—

現実的な問題点の発見と解決の過程に自己育能力を活かした授業展開を実践することで、生涯学習の基礎となりうる問題解決力の定着を図り、「もの」と「ひと」とのかかわりについて、理解を深め、主体的に生活を創造する実践活動が活性化できる。

以上のような研究仮説を立証するために、以下のような研究内容を実践する。

- (1) 生徒の実態調査と分析
- (2) 技術・家庭科における自己育能力を活かした授業開発
- (3) 技術科における豊かな学びを育むトータルカリキュラムの編成



【間伐材でベンチを作る生徒】

《外国語科の提案》

生徒の英語学習を支えるメタ認知ストラテジーの育成

ーVisual English Communicationの試みー

中野 光夫 小川 正晃

外国語科では、小学校と連携した効果的な英語指導法の開発において、生徒の「外国語によるコミュニケーション能力の評価方法」の開発に取り組んできた。そこで考案された「ALT(あるいはJTE)による個別面接」による評価方法は、5年間の実践を重ねている。しかしながら、授業中に発生する生徒の「外国語によるコミュニケーション」をどのように評価し、その評価内容をどのように生徒(個人と全体)と共有するかについては、効果的な方法が見い出せないままである。そこで、授業中の生徒の発話を、指導者と生徒がともに見つめ、ともに分析する活動を開発する必要があると考え、その研究に着手しているところである。外国語科は、その試みを「Visual English Communication」と名づけた。本来、音声による発話行為はすぐに消えてしまい、生徒だけでなく指導者にとっても、それらを正確に分析することは困難であると思われる。そのような「外国語によるコミュニケーション」をもう一度浮き上がらせ、深く見つめる方法を見いだすことが、本研究における目標である。具体的には、＜授業中の「外国語によるコミュニケーション」をビデオに録画しておき、①再生される映像を見ながら、発話内容を書き取る。②再度、再生映像を視聴し、なぜそのような発話を行ったのか分析する。③自分ならどのように発話したか思考する。④分析したこと、思考したことを発表し合う。⑤発話した生徒自身の振り返りを聞く。⑥自己のコミュニケーション能力に関する課題を記述する。＞という活動を実践していきたい。

このような指導において育成される能力は、自己のコミュニケーションをセルフ・モニタリングする「メタ認知ストラテジー」であり、まさしくこれは外国語科における「自己育成力」であると考えている。

《学校保健の提案》

生涯にわたって、自ら健康なライフスタイルを確立するには

ーこころの健康づくりー

久米 恵子

体の不調を訴える保健室来室者の多くは、友だちや親、教師など身近な人々との関係の中で心が傷つき、気力を失い、生活リズムを乱し体調を崩している。傷ついた心を取り戻し意欲をもつには、頑張らなくてはという思いだけでは難しい。自分を受け止めてもらえる人と人との関係づくりの中で癒され、気づき、自ら気力を回復させ徐々に体調に変化が現れてくる。それらは自分で解決していかなければならないものであり、それによって成長でき、周りにも目をむけることができる。このことは、本校研究キーワード『自己育成力』の流れそのものであると思われる。

そこで、来室した生徒に対し、訴えが器質性疾患の兆候がなく、心因性からくるものであることを理解し、気楽な気持ちでできる心理テストを取り入れ、生徒が心を開き自分の気持ちを自由に気楽に表現することで、生徒自身が自己評価でき、自力で解決できるようになるように支援していきたい。

選 択 教 科 (平成15年度の実践)

選択教科ではトータルカリキュラムという視点から、共通学習で身に付けた基礎基本を踏まえ、発展的な学習が展開できるように設定した。特に、全教科共通の研究キーワードとして「課題設定力」「課題解決力」を掲げた。「課題設定力」とは、自己評価に基づいて次なる学習課題を考え、学習内容の具体的方略を設定する力。「課題解決力」とは、自己の課題をさまざまな方法を用いて追究し、学習目標に到達する力として捉え、それぞれの力が相互に連環し合うことで自己育成力のスキルアップに直接つながるものと考えている。各教科の学習においては、この連環の中で課題解決の方略の妥当性を指導する場合と、徐々に課題のレベルを高めていく場合の2パターンの展開を現在試行中で、我々はこうした点において授業開発を行い、併せて自己育成力を高めていきたい。

なお、本年度は「5・4制」の研究という視点から、小学6年生で4教科、中学1年生においても実技教科で選択を実施し、課題設定力及び課題解決力に関する習得状況について検証を行おうと試みている。

第1学年 週1時間 (計20時間)

音 楽	十川裕史	音楽っていいなあⅠ 美しく響かそう！トーンチャイムの世界
美 術	河内直人	びっくり！そっくり！ミメシスアート
保健体育	長尾重紀	遊びたい人この指止まれ！
技 術	丸岡正則	EM生ゴミ堆肥でプランター栽培をしよう
家 庭	宮脇委子	「食事の取り方を考えよう」 より豊かな食生活を送ろう

第2学年 週1時間 (計35時間)

国 語	佐藤浩二	対戦！「Rグランプリ」 華麗なるワードバトルへの道
社 会	片岡孝暢	平成の遺蹟使 中世・近世の坂出や港湾都市宇多津の景観を訪ねる旅
数 学	半山章人・岡田美江	あなたもこれで数楽者 数学的な考え方を磨く
理 科	真鍋正史・石川恭広	あなたは未来のサイエンティスト！
外 国 語	小川正晃	Let's Enjoy Singing in English! 『上手に話せる』英語の発音を目指して
音 楽	十川裕史	音楽っていいなあⅡ (前期) 音から感じる (後期) 音楽を奏でる
美 術	河内直人	さぬき未来都市計画 環境デザインの視点から
保健体育	長尾重紀	(前期) マスマスダンスサーズ (後期) スルスルススポーツ
技 術	丸岡正則	中庭に間伐材でベンチを作り、滝の音をきいてみよう
家 庭	宮脇委子	手作り服に挑戦しよう

第3学年 週2時間 (計70時間)

国 語	佐藤宏一	メディアで語る 心を語る -こちら附坂中プロダクション-
社 会	安藤孝泰・伊藤裕康	私たちのプロジェクトX (中国編)
数 学	半山章人・岡田美江	あなたもこれで数楽者 数学的な考え方を磨く
理 科	真鍋正史・石川恭広	あなたは未来のサイエンティスト！
外 国 語	中野光男・Blanca Yumbe	¿Cómo se dice en español? 英語で学ぶ「基礎スペイン語」講座
音 楽	十川裕史・田中栄子	音楽っていいなあⅢ (前期) 筆に親しもう (後期) 筆を極めよう
美 術	河内直人	感動・発見！日本の美 雅な箔絵の世界へようこそ
保健体育	池下一朗	Let's make (マスゲーム・ニュースポーツ) myself!
技 術	丸岡正則	(前期) 不平等な世界でもっとも算数が面白いようにしよう
家 庭	宮脇委子	郷土に根ざした生活実践をしよう 先人の知恵に学ぼう

総合学習 現代的課題領域「さぬき未来学」(平成15年度の実践)

これまでの「さぬき未来学」の実践研究で得た成果や課題をもとに、本年度大きくカリキュラム改革を行った。

「さぬき未来学Ⅰ」では、小学6年、中学1年の異学年合同において、総合学習を実践するための基礎学習として「調べる力・まとめる力・発表する力」を中心課題とし、教科的関わりをふまえた合科によるコース編成のもと、各テーマについて調査・研究させながらその方法を学ばせていくものである。

一方、中学2、3年における「さぬき未来学Ⅱ」では、今までの学びを総合的にとらえ、生徒個々に内在する8つの知性に視点をおき、その知性を自己の学びを評価する切り口として振り返らせ、自己の学習状況を理解させつつ、今後の新たな学びを構築させ、自己を見つめ直す場として位置づけた。

【さぬき未来学Ⅰ】 対象学年：小学6年生、中学1年生 前、後期：各20時間

領域	コース	支援教官(教科)	学習活動のテーマ
文化	文化1	佐藤浩(国語)、長尾(保体)	おいでまい。さぬき！
	文化2	中野(外国語)、森田(小学校)	名づけ親の心を読む！-生活のなかの外国語-
自然	自然3	岡田(数学)、横川(小学校)	未来への航海-エネルギー編-
	自然4	真鍋(理科)、宮脇(家庭)	わが家のごみダイエット大作戦！

【さぬき未来学Ⅱ】 対象学年：中学2年生、中学3年生 全期：40時間

領域	コース	特に育成する知性	教官	サポートマテリアル(支援素材)
文化 自然	さぬきA	①言語的 ⑥人間関係形成 ⑦自己観察・管理	佐藤 久米	・日本文化 ・自己表現 ・脳と体 ・集団心理 ・人の心 ・自分の心 ・男と女 ・人間関係 ・生命(いのち) ・さぬき人の考え方
	さぬきB	①言語的 ②論理的-数学的 ⑥人間関係形成	半山 小川	・異文化理解(イスラム圏)・・・生活習慣、言語の違い、ものの考え方、マナー・エチケット ・異文化理解(欧米)……………生活習慣、言語の違い、ものの考え方、マナー・エチケット
	さぬきC	③空間認知 ④身体-運動的 ⑥人間関係形成	片岡 丸岡	・さぬきの交通史 ・さぬきの五街道 ・おいり ・さぬきの郷土食 ・古民家 ・エコハウス ・電化住宅 ・ものづくり
	さぬきD	③空間認知 ⑤音感 ⑧自然との共生	河内 十川	・日本の美 ・伝統工芸品 ・模型 ・私のメロディー ・わらべうた ・ため池の魚
	さぬきE	③空間認知 ④身体-運動的 ⑧自然との共生	安藤 池下	・ため池 ・エネルギー ・空海 ・瀬戸大橋 ・郷土 ・スポーツ全般 ・坂出の今昔 ・生物学(魚、昆虫)
	さぬきF	②論理的-数学的 ④身体-運動的 ⑧自然との共生	石川 島村	・エネルギー(発電) ・放射線 ・農業 ・空気 ・日光 ・おいしい水 ・水(湯水) ・塩田 ・丸亀城 ・産業(うちわ、手袋)

さぬき未来学Ⅰ（小6・中1）

文化1【国語科・保健体育科】

おいでまい。さぬき！

～郷土讃岐を未来へ発信～

佐藤 浩二(国語科) 長尾 亜紀(保健体育科)

県外に向けてさぬきの魅力をPRする映像作りに取り組んでいる。映像の内容は「言葉による表現」と「体による表現」で、テーマは「自然・食・名所」の三つである。学習の流れは、〔①テーマごとにそれぞれ「言葉担当グループ」と「体担当グループ」に分かれる。②話し合いによって具体的テーマやキーワードを決める。③キーワードをもとにイメージを具体化して作品を練り上げる。④言葉による表現と体による表現の調和を図る。⑤フィールド学習でビデオ撮影をして発表会を行う。⑥学習のまとめをする。〕となっている。言葉を作り上げる学習では、とにかく説明的になりがちなものを、受け手にイメージを強く印象づけるものへと洗練させている。

文化2【外国語科・家庭科】

生活英語標本箱 ―外国のことばや文化のある生活―

中野 光夫(外国語科) 森田 浩文(家庭科)

昆虫の代わりに、街のなかの英語や外国語を採集し、その意味や内容、そしてそれら外国語の使用目的やねらいを分析することが学習課題である。この活動を通し、外国のことばや文化を取り入れることにより、生活を豊かにコーディネートできる喜びを実感させたいと考えている。

生徒はフィールドワークにおいて街で見つけた英語や外国語の標本箱(アルバム)を作成するが、そのアルバムの最終ページには、さぬきの風物を英語で表現した創作写真を組み入れることにしている。

自然3【数学科・理科】

未来への航海 ―エネルギー編―

岡田 美江(数学) 松浦 正裕(理科)

文明社会に生きる私たちの生活は、大量のエネルギーを消費することで成り立っている。しかし、私たちは生活を営む上で、どれくらいエネルギーを意識しているだろうか。そこで、本未来学では、生活に利用されているエネルギーの種類や特徴、利用方法などについて多くの情報を集めたり、学校や家庭内の消費電力を調べたりしながら、今後の生活のあり方を探っていくことをねらいとしている。途中、四国電力の方にも出前授業に来ていただくなど学習を進めた。最後のまとめにはグラフや表を有効に使い、調べてきた内容を文化祭で発信する予定である。



【四国電力の方を招いての発電の仕組みについて学習】

自然4【理科・家庭科】

わが家のゴミダイエット大作戦！

— 地球にやさしい3R(Reduce・Reuse・Recycle)リーダーズへの道 —
減 量・再 利 用・再生利用

真鍋 正史(理科) 宮脇 委子(家庭)

本コースは、エネルギー資源の問題を、「ごみ」という少し変わった視点でとらえ、地球にやさしい未来社会を考えるための体験的学習コースである。生徒は、自分の家庭でのゴミ減量化に向けて、リサイクル活動や、省資源化などをテーマに掲げて取り組んでいる。まずは、自分の家庭での一週間分のゴミの量を測定することから入る。そして、様々な省資源へ向けた取り組みを実施しながら、一週間ごとのゴミの量が、どのように推移してきたかをグラフ化し、提言にまとめる。また、フィールドワークでは、クリントピア丸亀の見学や、市内のスーパーでリサイクル活動についての実態調査を行い、ゴミの減量化という視点から、エネルギー問題をとらえ提言しようとしている。



【スーパーで開取り調査をしている様子】

さめき未来学Ⅱ（中2・中3年）

さめきA【人間関係形成知性】【自己観察・管理知性】

佐藤 宏一 久米 恵子

本コースは、人との関係において、他人の感情を見分け適切に反応する力や、自分自身を的確に認識する力をテーマとしている。生徒は、「自分は一体何者なのか」「どう振る舞えば円滑な人間関係が築けるのか」といった日常の人間関係に対する不安や悩みを抱いて受講しており、成長の中で自分を探し揺れ動いている姿を見ることができる。最初の授業で行った自己分析では「必要以上に他人を気にする」「嫌われたくないと思って自己を偽る」という自己に対し、「本当の自分を知りたい」「本当の自分を出したい」という自己課題を挙げる生徒が多かった。

そのため授業では、集団の中で体験的に自己の内面を見つめられる講義及び演習を組み、自己感情のコントロールや自己開示、他者信頼等、心理的作用を各自が実感できるよう工夫している。1学期に実践したブラインドワークでは、「心を開き、人を信頼することの大切さ」を実感したという感想が多く発表された。 【演習：ブラインドワーク】



さめきB【言語的知性】【人間関係形成知性】

半山 章人 小川 正晃

本コースは、日本と欧米・日本とイスラム圏を比較しながら、日本と外国の文化や習慣などの違いについて学習している。特に生活習慣の違い・考え方の違い・マナーやモラルの違いなどに焦点を当てて、詳しく調べている。さまざまな情報を収集するために、直接外国人に会い、外国語を用いてのインタビューを試みる生徒がいる。また有力な情報を求めて、日本にある各国大使館に連絡を取ろうと試みる生徒がいる。このような情報収集の過程で、自らも『言語的知性』や『人間関係形成知性』を磨き伸ばしていくことが、選抜者全員の共通した大きな目標である。‘人’と‘人’がふれあう中で、特にこれら2つの知性が磨かれると考えている。私たちは生徒に、できるかぎり人と接する中での情報収集を心がけるように、カウンセリングなどを通して絶えず声をかけている。

今生徒は上記の情報収集方法以外にも、図書館に足を運び関連書物を探したり、インターネットを用いて関連情報を検索したりと、2学期末に行われる発表会の準備を懸命に進めている。

さめきC【空間認知知性】【身体－運動的知性】

片岡 孝暢 丸岡 正則

生徒の「空間認知知性」や「身体－運動的知性」を振り返らせて、より伸ばしていく視点から2人の教師が支援素材を提示し、一人ひとりの課題解決のために関わっている。この2つの知性を生かし伸ばすためには、写真や地図、ビデオなどを用いて比較検討したりアイデアを絵に描いて説明することや、記憶や理解を高めたり思考力を深めるために、「具体物」を使って表現することがきわめて有効であると考えている。



【フィールドにおける開取り調査】

1学期の授業における実践例としては、空間的な広がり視点から、自分の部屋のリフォームを考えるために間取を調べたり、香川の食文化などについて情報収集をした。このことをもとに、夏休みに各自の課題をさらに追究し、2学期の授業では、具体的に表現したものをお互いが検討し合う予定である。

さめぎD【空間認知知性】【音感知性】

十川 裕史 河内 直人

本コースは、対象が特定の空間（領域）内にどのように位置（関係）づけられているかを全体的かつ瞬間的に認識する知性「空間認知知性」と、多様な音・リズム・メロディーを認知可能な力、創造する力、表現する知性である「音感知性」に主眼をおいている。これらは比較的教科性の高い知性（音感→音楽的、空間認知→美術的）であるため、生徒の多くは教科と知性との関連を強く意識した課題を設定している。したがって、知性育成の視点での選択と、知性を表現手段とした選択の生徒が混在しているが、いずれの場合においても生徒の課題意識は学習展開の中で双方向的に関連すると考えられる。

これまで、より豊かで潤いのある未来のさめぎの在り方を提言するために絵・図等を用いてパンフレットやため池図鑑を作成したり、郷土を愛でるオリジナルの作曲や音集めをしてきた。今後は、それらの取り組みをもとに、自己の知性特性やさまざまな知性との関連に気付かせたいと考えている。また、今後の自己の知性開発や、日常の学習への取り組みに生かせるような展開ができるように導きたい。



【ため池図鑑作成のための実地調査】

さめぎE【身体ー運動知性】【自然との共生知性】【空間認知知性】

安藤 孝泰 池下 一顕

本コースの生徒は、次のようなテーマをもってコース選択をしている。例えば身体ー運動知性では、「瞬発力を向上させるために」・「身近なバリアフリーの実態調査」、自然との共生知性では、「ため池の現状」・「蝶の分布調査」、空間認知知性では、「坂出の過去と現在」などである。培いたい知性がまちまちなので初めに、KJ法による一斉学習を行い、どんな知性をどんな方法で学んでいこうとしているのかを考えさせ、グループ分けを行った。その上で伸ばしたい知性と研究内容を生徒と教官が相談の上、支援教官を決定した。具体的な方略としては、身体ー運動知性では、自らの体を使って思考や感情を表現できることを目標に一被験者として体験することでその成果を実感させている。自然との共生知性では、自分のテーマに沿って、生物（昆虫・魚）などの生態を調べたり、現在の生活環境調査を行い、過去の調査結果と比較させるために学習の場を野外に求めている。空間認知知性では、地図や写真・実物を見て、それを視覚化することによって、学ぶ内容をふりかえらせている。



さめき F 【論理的－数学的知性】 【自然との共生知性】

石川 恭広 島村 佳寿美

着目した知性の1つ「論理的－数学的知性」は、身のまわりの事象に対して、実証性、再現性、客観性をもった見方や考え方で探究活動を進め、検証できる力。そして、その事象を数字や模式図、地図、グラフなどを利用して、根拠をもった明快な論証ができる力である。この知性を伸ばすために、各学習場面で、常に実証性、再現性、客観性をもった見方や考え方で学習活動ができているかどうかの意識づけ、再確認、評価を行っている。

また、もう1つの「自然との共生知性」は、自然と関わる中で、様々な自然事象の存在に気づき、その原因や性質など自然の素晴らしさを認知したり、動植物の種類を見分け、種相互の関係を把握したりできる力である。生徒の中には、農園づくりや塩づくりなどを行い、自然事象と直接関わり自然を探究していく過程を見通しをもって進めている。



【生徒が農園をつくっている様子】